第１８回（通算２６７９回）例会記録　２０１５年（平成２７年）１１月１１日（水）

- 司会進行／大城　文博
- ロータリーソング／手に手つないで・四つのテスト
- ゲスト／上江洲　儀正氏（南山舎（株）代表）
- ビジター／高橋　信一氏（北上 RC）
- メークアップ／羽地宏幸・遠藤正夫・渡久地明
  小林昌道・上勢頭保（計 5 名）

出　席　報　告

会員総数　39名　出席義務会員　38名
出席数　　22名　欠席数　　16名
出席率　57. 89％（11月　通算出席率　59. 21％）

本日のニコニコ

BOX　￥2,000（累計￥31,000）
コイン　￥3,435（累計￥47,871）　合計￥78,871

北上ロータリークラブ　　高橋　信一

会長挨拶：新　賢次

今年の石垣 RC のテーマ「奉仕・天資と文化」を揚げさせて頂きました。天資という言葉、あまり耳慣れないですが、その人が生まれ持っている才能という意味ですが、そういう人たちが文化を作っているというふうに思う訳であります。

私どもの織物業界でも、生まれ持った才能をお持ちの方がいます。実は今週末 12 日-15 日、「宮古と八重山の織物展」を開催いたします。NPO 法人という私が代表をやっている組織なんですが、宮古織物事業協同組合に協力して頂いて、初めて八重山の地で展示会をやるということです。宮古上布は苧麻（麻糸）で天然の素材で織物を作ります。これを栽培して糸にする。これが大変な作業で技術がいるわけです。この実演を今回やって頂こうという事で、ぶーうみ、宮古では魔法の手と言われている、手を持っている方が石垣に来て実演してくださいます。そういう才能を持った人がいるから、宮古の織物も文化として守って育っているんだなと感じます。ぜひこの機会に見るだけでけっこうですので、来て頂ければなと思います。

さて、本日のテーマ「八重山の社会と文化」です。ご存じの方も多いと思いますが、南山舎の事業所として 1987 年に創業しておりますが、八重山手帳という、地域手帳を創業から毎年発行しています。そういう地域手帳をいち早く出したという事でございます。その他「月間やいま」現在 262 号という事で、地元の情報を掘り下げて、それを機関誌にしているわけです。正に地元の情報を文化としてお仕事されている方だと思います。そういう方が今日地元の文化を語って頂けるという事で、大変喜んでおります。実は親戚でもございますが、そのやいま手帳の表紙にもミンサー柄を使って頂いております。そういう文化が社会の発展に繋がっているという点もぜひお話を聞きたいと思います。今日はよろしくお願いします。

委員会報告:仁開　一夫

ソウル世界大会のご案内をしたいと思います。今回は国際旅行社が企画しております。28 日～31 日の 3 泊 4 日になっていまして、料金が 158,000 円となっています。これは那覇発ですので、石垣からだと若干上乗せになります。12 月 15 日までに登録すると登録料が安くなりますので、早目に登録をお願いします。

ゲスト卓話:上江洲　儀正氏

南山舎（株）代表
テーマ「八重山の社会と文化」

八重山ってどんな所？と聞かれた時に、日本最南端七色の珊瑚礁に囲まれた亜熱帯の島々とか、日本一星がきれいでベストダイビングエリア国内一ですよとか、セミのなき声が聞こえないのは 1 年の内 1 月だけという温暖な地域ですよとか、また歴史的には八重山には三大悲劇と言ってマラリア、人頭税、明和の大津波、これが八重山の特徴なんですよとか、祭りと芸能が盛んな島ですよとか、人物で云うとオヤケアカハチ、大濱信泉、具志堅用高、ビギンがいますね、新　賢次もいますね、というふうに紹介すると思いますが、僕はまず、八重山は合衆国ですよと紹介することにしています。八重山の社会と文化を考える時、それが一番ぴったりではないかと思うからです。つまり八重山の社会と文化を形作ってきた一番の要因はその合衆国的な人の混合、交流ではなかったかというふうに思うんです。合衆国を辞典で引くといくつかの州が集まった 1 つの国とありますけど、八重山合衆国と言う時、外から集団で移住して来た人たちが多いという事、そして彼らは自分たちの文化をある程度固持して住み着いていて、それが八重山の中でうまく調和しているという状態を言っているのだと思います。

それでは八重山合衆国の歴史を見ていきたいと思います。まず、1892 年（明治 25 年）琉球処分によって没落した首里那覇の士族を中心に 289 人が石垣島平得、シーナ原に入植します。ところがこれは長くは続きませんでした。マラリアなどで 10 年後には解散します。その時島に残った人には翁長さんとか神谷さんなどの名字がいるようです。同じころ四国徳島の中川虎之助が 300 人余りの農業移民を連れて名蔵に移住します。八重山糖業（株）を創ってサトウキビの製糖を行うのですが、2 度の大きな台風で壊滅状態になり、これも失敗します。中川虎之助はその後台湾に渡って成功するのですが、残った人たちはどうなったか。1920 年（大正 9 年）その頃の統計によると 30 戸 69 人がまだ名蔵に居住していたといいます。その中から四か字に出て商売を始めた人たちがいました。大坪さん、井上さん、仁開さん、清水さん、三宅さんなどがそうだと言います。中川虎之助は地元の農民約 500 人を雇ってサトウキビの栽培をさせました。当時八重山はまだ物々交換の時代でしたが、そこでは賃金が支払われ貨幣経済が広まっていくきっかけになりました。

それから明治中期には糸満漁民たちが四か字の海岸沿い定住するようになります。1894 年（明治 27 年）には 108 戸 159 人の漁民が住んでいました。サバニの数が 38。それからやがて明治の終わりごろからカツオ漁が中心になってきます。これは初めの内、地元の寄留商人たちが船主となって漁をするようになりますが、糸満漁民たちはその餌となる小魚などを取って生計を立てるようになってきます。以後カツオ漁は盛んになっていって、八重山全土に広がって 1977 年（昭和 12 年）には 659 戸 2,995 人の漁民になるわけです。その時には発動機船が 58 隻、サバニが 500 隻に上ったと言います。また、日清戦争で台湾が日本の領土に組み込まれ、台湾と本土間の航路が開設されて船が八重山にも寄港するようになります。すると、大和や那覇から寄留商人がやってきて商業活動が活発に行われるようになります。1905 年（明治 38 年）の琉球新報は「他府県より来りて商業を営む者 100 戸内外と報じています。」今のユウグレナモールの辺りです。

1885 年（明治 18 年）に開かれた西表炭鉱、本土や台湾からたくさんの鉱夫が送り込まれました。第一次大戦後や昭和 10 年前後の好景気の頃には 1 つの炭鉱に 1,000 人以上の鉱夫という所も珍しくありませんでした。そこには 300 人収容の劇場を持つ炭鉱村が出来て、その中には炭鉱チップがお金として流通し、近隣の村は香木や野菜を売りに炭鉱に通いました。しかし鉱夫達は長時間労働を強いられ、納屋制度で厳しく管理され逃亡するとリンチを受けました。炭鉱からの逃亡者を炭鉱ピンギムンと島の人達は言いましたが、見せしめのための酷いリンチにも関わらず炭鉱ピンギムンが後を絶たなかったのです。太平洋戦争が始まると鉱夫達は陣地建設などに駆り出されて、戦後それぞれの故郷に引き上げましたが、八重山に留まった人たちも多くいます。台湾からやって来たのは炭鉱夫だけではありませんでした。

1935 年（昭和 10 年）パイン栽培農家 50 戸 330 人が名蔵に入植しました。台湾でパイン会社の統合が行われ、そのあおりを受けた大同パインと農家の人達が入植して、八重山に初めてパイン産業を興したのです。同時に彼らは水牛、革新的な農機具などを導入し、八重山の農業にインパクトを与えました。彼らの末裔たちがこの地に留まり、現在八重山の大きな力になっている事は、皆さんご存知の通りです。

また 1973 年には沖縄県振興 15 か年計画がスタートしています。これは八重山の開拓地 8,000 町歩に 15 年間で 4,505 戸を入植させる計画でしたが、途中戦争でとん挫します。この計画途中まで出来た集落が石垣島の開南、川原、西表の大原です。大原には新城島から移住してきます。戦後になっ

ても自由移民、計画移民で多くの人達が八重山に入植してきました。計画移民というのは琉球政府が行った集団移民の事で、米軍が基地を拡大したために土地をなくした人達のためにボリビアに移民する。それから八重山開拓移民を募集して送り込んだわけです。八重山移民は 1952 年（昭和 27 年）から始まり、沖縄本島や宮古島から石垣島北部、西表島東部に多くの人達が入ってきました。自由移民というのは計画移民がスタートする 27 年までに入植してきた人たちの事です。ある統計によると自由移民、計画移民を合わせて石垣島の 19 地区に 615 戸 2,085 人、西表の 5 地区に 187 戸 580 人、合わせると実に 3,385 人が八重山に入って来たわけです。

さて、このように八重山は多くの移住者を受入れてきました。こうして見てくると、八重山がなぜ合衆国足り得たかが分かります。1 つは八重山には豊かな土地と豊かな自然があったという事です。しかしそこには阻害要因もありました。マラリアと台風です。せっかく入植したのに土地を離れざるを得ないことが多々ありました。もう 1 つの合衆国足り得た条件というのは、近くに台湾があったという事です。台湾本土からの航路が開設されたために多くの人と物が集まり流通しました。この事は今後の八重山の生きたかを示唆しているのではないかと思います。八重山が末端のどん詰まりにならないように人と物の流通を促すことが必要だと思われます。

では合衆国は八重山の社会と文化に何をもたらしたか。まずは新しいものをもたらしたと言っていいと思います。貨幣、商業、漁業、石炭、パイン、水牛、農機具などなど、その新しい物によって島に活力が与えられ、八重山の社会と文化は一段と発展していきました。よく田舎は保守的で新しいものを受入れないと言いますが、それは全くの誤解、あるいは曲解であって、誰かが言っていましたが、本当は田舎こそ新しいものを欲しがるものでございます。正に島はそういうものでした。新しい物の入って来ない島ほど退屈な所はありませんでした。そしてその新しいものが受け入れられていくかどうかは、これまで島の長い時間の波にさらされて決まっていきました。所が今やスピード時代、これまでの時間という島の武器は通用するかどうか心配です。新しい人、物、文化を受入れて合衆国化していく過程で島の中では自然に協調、協力、調和というような事が大事にされるようになりました。ところが、一方その事によって、例えば標準語が励行され、方言を使える人が少なくなりました。平均化して個性がなくなったりしていくのではないかという心配も考えられます。今後の課題だと思います。10 年ほど前に起こった八重山への移住ブームは一頃の勢いはないようですが、まだ続いています。かつてのような集団入植ではなく個的な移住であまり目立たなくなりましたが、合衆国化は続いていると考えられます。新しい企業の進出などもそこに数えていいのかもしれません。静かな合衆国化は僕らをどこに連れて行こうとしているのか。注視しなければいけないと思います。

僕は八重山合衆国のこれからを心配しています。かつて多くの人と物を受入れてきた八重山の豊かな土地と自然が文明の発達した現在から見ると色あせて見えてくるのです。

僕らの中学生の頃、今から 50 年前ですが、当時の名蔵湾はシャコ貝がうじゃうじゃと、青い口、黒い口で気持ち悪いぐらいでした。足で砂浜を掘るとハマグリがすぐに見つかりました。時代が変わったんですね。ならば新しい時代の八重山合衆国の構築が必要だという事だと思います。RC の皆さんはもちろんですが、叡智を結集して新しい八重山の未来を開いていってほしいと思います。

さて、最後に八重山合衆国について 1 つ指摘しておきたいと思います。八重山にはもう 1 つ内なる合衆国があるという事です。つまり石垣島、竹富島、小浜島、黒島、新城島、西表島、鳩間島、波照間島、与那国島の 9 つの島々が昔も今も八重山合衆国です。それぞれの島が特色のある文化を持ち、9 つ合わさって魅力的な八重山合衆国を創っています。ただそこにはさまざまな悩みもあります。

その 1 つ波照間島の話です。島にタネを残してほしい――。調査で波照間島に長期滞在していたオランダの人類学者コルネリウス・アウエハントに、島の人が頼んだというのである。東京オリンピックの翌年 1965 年のことである。調査に同行していた夫人の静子さんが書いている。

暑い日に「島のお偉い方」がわざわざネクタイを締めてやってきた。アウエハント氏とまずは乾杯。次のように言ったという。

「波照間のような孤島にとって遠くから来た優れた《たね》は貴重です。しずアマー（私への敬語！）にはちょっと我慢してもらうとして、島の元気な娘たちから先生（主人への敬語！）の気に入るのを 2、3 人選んで、あなたの《種》をおいて行ってほしいのです。そうしたら 20 年も経てばこの小さな島から、五輪の金メダル選手が出るかもしれません！　乾杯」

最近静子さんにお会いする機会があって確認したら、「当時その方は町会議員でしたヨ」とのこと。本当の話だという。まさか本気でそう言ったとは思えないが、しかし、その言葉には、シマチャビ（離島苦）の思いが表出していると思うので、町会議員氏の気持ちを勝手に推測して島のことを考えてみたい。

「あなたの《種》をおいて行ってほしい」という言葉は痛切である。が、ずっと昔の話ならいざ知らず、戦後 20 年たった頃の発言であればやはり冗談半分、そこに本音も滲ませたということだと思う。本音というのは、島こそ、優れたもの、新しいものが欲しいという話ではないかと思う（たくさん欲しがるというのではないが）。島は保守的で古いものを多く残しているというイメージは間違っていないが、しかし古いものを守るだけでは共同体は継続できない。優れた新しいものが必要である。時代に取り残されては先細りしかないのである。もっとも「優れた新しいもの」が共同体を破壊してしまっては元も子もないから、その限りにおいてではあるが。

1965 年というと、当時、八重山の島々は人口流出が激しく、過疎化に悩んでいた。景気がよく便利な都会へ都会へと人々は靡いていった。それには東京オリンピックが果たした役割も大きかった。島に残った者たちのなかには己の不遇を嘆いた者も少なくなかったろう。町会議員氏が島で生きる己を不遇と感じていたかどうかは別として、少なくとも政治家であるからには島の未来が気になっていたことは確かだろう。

東京オリンピックの柔道で優勝したヘーシンクはアウエハントと同じオランダ人である。（ちなみに「ウランター」という島の方言はひろく外国人を指していうのだが、直訳すれば「オランダ人」である。なぜ外国人をウランターというか。宮良當壮の『八重山語彙』には「欧米人中最初に来島ありしを以てなり」とある）。だから町会議員氏は、まさにウランターであるアウエハントに「20 年も経てばこの小さな島から、五輪の金メダル選手が出るかも」と言いたくもなったのであろう。島から傑出した人物が出れば、それは島人の誇りとなり若者に夢を与えることになるし、その人物によってもしや島になんらかの恩恵が与えられるかもしれない……。そこには、満たされない分、熱望がある。そこを突破したいという熱望。島に、優れた新しいものを生み出すことができるのなら、時間をかけてそれを育てることは島の得意とするところ。今は我慢しても、いつか花開くときがくる……。しかしその繰り返しを島はどれほどつづけてきただろう。

また、町会議員氏の脳裏には八重山歴史の英雄であるオヤケアカハチとナータフーズ（長田大主）のことも浮かんでいたかもしれない。共に 15 世紀後半波照間島に生まれ、石垣島で豪族となって、1500 年のオヤケアカハチの乱で敵味方に分かれて闘った。そしてアカハチは琉球王府（ナータフーズは王府側についた）に敗れたが、なにしろふたりは波照間島の生まれである。島の誇りである。誇りをもてれば、不便でも不足でも耐え忍んでなんとか共同体を維持継続できる。アウエハントはアカハチの出自について「伝説によれば、与那国の鬼虎と同じく、この新生児には鬼子の特徴がすべて備わっていたので、高那崎の岩場に捨てられたという」（『HATERUMA』2004 年榕樹書林）と書いている。鬼子の特徴がどういうものかは知らないが、八重山地方ではアカハチは「赤い髪の大男」であったと言われている。つまり、ウランターの子ではなかったか、と。だから町会議員氏は「遠くから来た優れた《たね》は貴重」だと言ったにちがいない。優れていれば遠くから来た鬼子だってかまわない。いや、だからこそ貴重なこともある。

波照間島は日本最南端の島である。フィリピンを北上した黒潮はまず波照間島を洗う。したがって古来波照間島には多くの漂着船があった。交易の途中に立ち寄った船もあっただろう。その結果、島では当然混血もおこったが、その他の「新しいもの」も持ち込まれた。小さな波照間島から出たオヤケアカハチが大きな石垣島で豪族になれたのは、当時珍しかった鉄器を手に入れたからではないかというのが、新川明の想像であるさもありなん、と思う。そういう決定的な「新しいもの」はないか、と常に島は考えている。せめて未来につ

ながるそのタネでも。

ところで、そのとき町会議員氏のなかを 20 年前の暗い記憶がよぎることはなかっただろうか。かの山下寅雄のことだ。戦争末期に島にやって来て、はじめはいい先生だったらしいのだが、ある日豹変して鬼軍曹となり、軍事作戦上邪魔だと島人をひとり残らずマラリアの巣窟西表島の南風見に強制疎開させた。たちまちマラリア地獄。たまらず島に帰ったら、家や畑は荒れ放題、牛馬も屠殺されて軍の食糧となり、マラリアはさらに猛威を振るって多くの人が亡くなった。当時の島の人口 1,671 人のうち、マラリアによる死者は 552 人にのぼった。

海の向こうからやってくるものの中にはたしかに危険なものもある。しかし島に貴重な、優れた、新しいものをもたらすかもしれない期待感から、島人はまずはそれを受け入れる。そして、そこから長い時間がはじまる。島のゆったりした時の流れなかで、それは揉まれ晒され育まれあるいは消えていく。島の懐は神の庭のように深いのだ。

静子さんに、調査当時に録音したという「オルル」を聞かせてもらった。「オルル」というのは自然を鎮める祈りである。神女たちが、水を掬うように組んだ両手を口に当て「オールール、オールール……」とくぐもった声で空や地や海に向かって祈る。その声音は、ゆったりと島の空気にたゆたい、大いなる神と自然に届けられるようである。ああ、こういうものと共にあるから、島人は厳しいシマチャビの中でも生きてこれたのかもしれない、と思う。ご清聴ありがとうございます。

韓国・ソウル国際大会旅行

（3泊4日）

日　付：平成28年5月28日（土）～31日（火）
　　那覇空港発、那覇空港解散
料　金：158，000円（概算）

早期登録で
割引料金

＜国際大会登録料＞
12月15日まで310ドル
12月15日～3月31日　375ドル
4月1日以降440ドル

・・例会風景・・

昨年友好クラブの提携をした、北上RCから高橋氏がご来会くださいました。

南山舎の上江洲さんありがとうございました。

国際ロータリー第２５８０地区

石垣ロータリークラブ週報

＜今月のロータリーレート　＄1=120円＞　　Weekly Report No. 2573

国際ロータリー・テーマ

世界へのプレゼントになろう

K. R. ラビ・ラビンドラン

2015－16年度 会長テーマ　「奉仕・天資と文化」

会　　長：新　賢次　　副会長：前木　繁孝
直前会長：上原　秀政　　幹　　事：宮良　薫
副幹事：前原　博一　　SAA・出席：羽地　宏幸
情報・会報：名渡山秋彦

創立記念日　1962年3月12日　（55周年）

2015年（平成27年）11月25日（水）　第20回　例会（通算2681回）

＜今週の職場：前原税理士事務所（前原　博一会員）＞

平成23年4月に開業して5年目になります。開業当初は顧問先ゼロからのスタートで本当に苦しい毎日でしたが、皆様の応援を頂き少しずつ事務所を拡大することができ本当に感謝の気持ちでいっぱいです。
これからも初心の気持ちを忘れることなく「自分次第でどこまでも行ける」を合言葉に職員一同頑張っていきますので宜しくお願いします。

例会日　水曜日　12：30～13：30
例会場　ホテル日航八重山（0980）83－3311
事務局　〒907-0013 石垣市浜崎町 1-1-4

TEL/FAX（0980）83－2917
URL　http://ishigaki-rotary.jimdo.com
E-mail　ishirotary@ninus.ocn.ne.jp